

沙羅の樹文庫だより

文庫あれこれ◆3 日降り続いた雨も、今日はすっかり晴れ上がり、暑くなるぞ！そんな文庫の日です。農業をやる人には、空梅雨はお困りでしょうが、雨がずっとどうしても気が滅入りがちですね。◆文庫の庭は、雨にうたれた姫しゃらの花で埋めつくされています。みなさんがいらっしゃる前にウッドデッキはA君兄妹がきれいにしてくれるでしょう。ノックアウトというバラがまだまだ咲き続け、足元の、今年も新たに植えられたサルビアが目映えます。◆アートフェスティバルも終わりました。今回の表紙の絵は、昨年のアートフェスティバルにお客さんとしてきてくださった、子どもに大人気の絵本作家ご夫婦(そのときは存じ上げなかったのです)を、おいしいコーヒーを届けてくださる会員の帽子屋さんがまた連れてきてくださり、自作の絵本をウクレレにあわせて、よみかかせと歌をご披露して下さることが急遽決まってその本番の様です。それが「子どものための若葉のころのおはなし会」で、前半は立川の方々のおはなしと手遊びで、後半はいわいさん、田中さんの楽しい(文庫のスタッフもお手伝いしての)、楽しい企画でした。八幡野の岩上書店さんも作者本の販売のお手伝いに来てくださいました。◆それから、嬉しいお客さんもありました。雨もよいの日だったのですが、若いお二人が見えて、長いこと、熱心に文庫の書棚をみていたのですが、帰りがけに、またいらしてくださいね、と言うスタッフに、実は今朝、婚姻届を出してきたのです！と。居合わせた私たちみんな、快哉をさけび、お二人の未来をお祝いしたのです。こんな幸せをアートフェスティバルはくれます。♥日が昇って文庫の中の本たちを照らしています。お向かいの明るい壁もさらに明るく光っています。お向かいもステキなお庭ができました。そして、しばらく空いていたお隣にも常住のご夫婦が移ってこられました。お庭造りを楽しみにしていらっしゃるのと、目の保養ができます。文庫にお誘いしてみました。◆今月も新しい本が待っていますよ！ (西村)

これからの催し物のお知らせ

★海の日のおはなし会 会場は伊豆高原駅大楠の下
7月14日(日)午後5:00~7:30
子どもの語り・ベテランの語り・うたと演奏

※文庫開館記念子どものためのおはなし会(文庫で)
7月15日(月)午前10:30~11:45
♥文庫も満7歳になりませ〜♥

✿8月、子ども《文庫で夏休み》を、ちょっと計画しています。 詳細は7月に! できるかなあ?

♪秋の夜長のおはなし会(大きい人向け)
10月19日(土)午後4:00~6:00

※秋の子どものおはなし会
10月20日(日)午前10:30~11:45
そして、

✿クリスマスおたのしみ会 & 納会
12月22日(日)午前10:30~12:00
みんなで1年の無事を感謝しましょう。

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆7月は**変則13日(土)、14日(日)**
開館記念日が海の日ですので、7月文庫の開館日はそれにあわせませ。(第2の土日です)
※15日午前は開館記念日おはなし会

◆8月は**16日(金)~20日(火) long**
◆9月は**通常14日(土)、15日(日)**
◆10月は**通常19日(土)、20日(日)**
◆11月は**通常16日(土)、17日(日)**
◆12月は**通常21日(土)、22日(日)**

※文庫の時間：土曜日は午後2時~5時、
日曜日は午前10時~午後3時

※毎月開館日(日)「子どものための小さなおはなし会(午前10:30~11:00)」があります。
✿おはなし沙羅の勉強会は毎月開館日(土)午前11:00~13:00です。✿

♥駐車のご協力感謝いたします。引き続きお願いします♥



絵本作家 いわいとしお・田中清代さんをお迎えして(アートフェスティバル・沙羅の樹文庫にて)

梅 雨

雨に林と空と私が塗りつぶされる
密雲に燐光がある
庭に苺の赤が耐えている
時間に雲が乗らない
物音に湿度がある
雨に私と空と林が濡れる

詩：谷川俊太郎

谷川さま、勝手に転載お許しください(さら)

♥ 来月7月の文庫開館日は、
1週間は早い**13日(土)と14日(日)**で〜す♥
(祝日《海の日》が沙羅の樹の開館記念日のため)

6月に文庫に入った子どもの本

えほん

『なんのにおい』『とりかえて!』(ビーゲンセン作 永井郁子絵 絵本塾出版 2013)※著者より寄贈
『トマトさん』(田中清代さく・え 福音館書店)
『もこもこもこ』(たにかわしゅんたろうさく もとながさだまさ絵 文研出版 1977) 『すいか』(石津ちひろ文 村上康成絵 小峰書店 2013) 『ぼくは恐竜ハコデゴザウルス』(土屋富士夫作・絵 岩崎書店 『はいチーズ』(長谷川義史 絵本館 2013) 『ノバとわたし』(マリア・ウエレニク作 宇野和美訳 光村教育図書 2012) 『でもだいじょうぶ!』(ジェフ・マック作絵 石津ちひろ訳パイ・インターナショナル 2013) 『あるひぼくはかみさまと』(キティ・クローザー作 ふしみみさお訳 講談社 2013) 『おおんなのことあめ』(ミレナ・ルケシヨバーぶん ヤン・クドゥラーチェクえ たけだゆうこやく ほるぷ出版) 『ねこのピート』(エリック・リトウィン作 ジェームス・ディーン絵 大友剛訳 ひさかたチャイルド 2013)

よみもの

『斉藤洋の日本むかし話 ふしぎな人の巻』(斉藤洋文 ひさかたチャイルド 2012) 『二分間の冒険』(岡田淳作 偕成社文庫 1991) 『あおい目のこねこ』(エゴン・マチーセン作 せたていじ訳 福音館書店 1965)※73刷 『ジュディ・モード、探偵になる!』(メーガン・マクドナルド作 ピーター・レイノルズ絵 宮坂宏美訳 小峰書店 2013) 『駅の小さな野良ネコ』(ジーン・クレイグヘッド・ジョージ作 齋藤倫子訳 徳間書店 2013) 『語りつぐ者』(パトリシア・ライリー・ギフト作 若もりうちすみこ訳 さ・え・ら書

房 2013) 『ギヴァー 記憶を注ぐ者』(ロイス・ローリー作 島津やよい訳 新評論 2010) 『カシヤの物語』(アリー・コンディ作 高橋啓訳 プレジデント社 2011) 『アリブランディを探して』(メリーナ・マーケッタ作 神戸万知訳 岩波書店 2013) 『マルチェロ・イン・ザ・リアルワールド』(フランシスコ・X・トーク作 千葉茂樹訳 岩波書店 2013)

ノンフィクション

『かわいいみんなのあそび』(かこさとし作 復刊ドットコム 2013)

☆広瀬さんからいただいた本☆

6月にも50数冊いただきました。スペースの関係で今月は掲載できません。前回の残りと同分半分ほど書架にはならべます。科学の本、いっぱいあるよ!

6月に文庫に入った新しい大人の本

フィクション

『想像ラジオ』(いとうせいこう著 河出書房新社 2013)※request 『銀河鉄道の彼方に』(高橋源一郎著 集英社 2013) 『いつも彼らはどこかに』(小川洋子著 新潮社 2013) 『いちばん長い夜に』(乃南アサ著 新潮社 2013) 『リボン』(小川糸著 ポプラ社 2013) 『ときぐすり』(畠中恵著 文藝春秋 2013) 『中上健次集9』(中上健次著 インスクリプト 2013) 『天堂狂想歌』(莫言著 中央公論新社 2013) 『マラーノの武勲』(マルコス・アギニス著 作品社 2009)

短歌・エッセイ

『歌は季につれ』(三田完著 幻戯書房 2009) 『たとえば君』(河野裕子。永田和宏著 文藝春秋 2011)※request 『フランシス子へ』(吉本隆明著 講談社 2013) 『あっちの豚 こっちの豚』(佐野洋子著 光文社 2001) 『日々ごはん』(高山なおみ著 アノニマ・スタジオ 2008)・『生きるということ』(黒井千次著 河出書房新社)

ノンフィクション

『怒らない禅の作法』※request (桐野俊明著 河出書房新社 2013) 『2030 年世界はこう変わる』(米国国家情報会議編 みすず書房 2013)※request 『日本人は中国人・韓国人と根本的に違う』(黄文雄、呉善花、石平著 徳間書店 2013) 『休む技術』(西多昌規著 大和書房 2013) 『東海道五十三次「食」ウォーキング』(幕内秀夫著 講談社α新書 2013) 『沖の島』(藤原新也、阿部龍太郎著 小学館 2013) 『素敵な絵本タイム』(佐々木宏子と岡山・ブー横丁の仲間たち編著 吉備人出版 2012) 『東海道五十三次東・西』(八木牧夫著 山と溪谷社 2013) ※折りたたみ地図

文庫

『ごはんのことばかり 100話とちょっと』(よしもとばなな著 朝日文庫 2013) 『先生のあさがお』(南木佳士著 文春文庫 2013) 『神去なあなあ日常』(三浦しをん著 徳間文庫 2013) 『半島の密使 上・下』(アダム・ジョンソン著 新潮文庫 2013)

2013年6月に読んだ本についての感想

6月13日 By 森林浴

『おどろきの中国 そもそも「国家」なのか?』

橋爪大三郎×大澤真幸×宮台真司著

講談社現代新書 2013年2月第1刷

橋爪大三郎・大澤真幸・宮台真司の3人はかねてから交流の深い社会学者で、橋爪と大澤は先に「不思議なキリスト教」と言う本を出して注目を集めた。3人中でやや先輩であり、また妻が中国人でもあって中国にもっとも詳しい橋爪大三郎が中心になって、橋爪が後の2人の質問に答える形となっている。最近の動向から「何で中国はこんなことするの?」という一般の疑問・疑念が凝縮しつつある現在、時宜を得た本であると言える。第1部が基本論で、第2部は毛沢東を中心に中国共産党の実態を、第4部は鄧小平の始めた「社会主義市場経済」後のモダン中国と日本はどう付き合ったらよいかという課題に取り組んでいるが、私としては第3部「日中の歴史問題をどう考えるか」が一番気になるころであった。最近議論がかわしましくなっている「そもそも日本は中国に侵略したのか」という重要なポイントは、意外なことに簡単ではなく、日本軍がなし崩しに中国に攻め込んでいることが分かる。そこでは日本側にきっちりした戦略・国策・政治決定が欠けていた。例えばこんな発言がある。大澤「1937年の盧溝橋事件は、明確な意思の裏付けのないまま偶発的に起きてしまった。——そのまま、長い日中戦争につながっていく。——本来は宣戦布告のようなことがなされてしかるべき」(P. 263) だから今、安倍総理が「侵略の定義は明確でない」などと主張する事態にもなるのだろうか。

『真実の満洲史 1894-1956』宮脇淳子著 岡田英弘監修 ビジネス社刊 2013年5月第1刷

満洲史というのは珍しいので読み始めたが、質問者(倉山氏)にたいする回答と言う形の会話調なので読みやすい。いわゆる自虐史観に対抗する「真の歴史」派の満洲史ということで、内田樹の「日本辺境論」や加藤陽子の「それでも日本人は『戦争』を選んだ」などの書物は「始めに結論を決めて、それに合うように都合のいいことだけを並べ立てる」という、私からみればひどい本です、と決め付けている。初めて知る事実も多く、それなりの面白さはあるが、しかし歴史書としてはかなり雑な感じは免れない。

『ゆうじょう』村田喜代子著 新潮社刊 2013年4月第1刷

雑誌「新潮」に2011年から13年2月まで連載。漢字にすると、「遊女考」。橋下大阪市長の従軍慰安婦に関する発言で一騒ぎが起こっているが、村田喜代子は明治30年代の廓の実態を熊本の大きな廓を舞台にして驚嘆すべき詳細さ、正確さで見事に描き出した。廓に売られるのは、もうこれ以下はないというような最貧層の娘ばかり。(逃げ出したある遊女を探してその実家に行った取立人が見たその家の全財産は、「縁の空け損じた鍋1個と古釜1個に、破れムシロ3枚、破れ昆布のごとき古布団2枚あるのみ」だったという。)主人公は硫黄島から売られてきた15歳(!)の青井イチ。各章のタイトルはイチの硫黄島弁で書いてあり、たとえば第2章は、「へがふっと おもいだす」(灰が降るとおもいだす)。やれ人権とかヒューマニズムとかそんなやわなものは始めから吹っ飛ばしてまい、廓の整然たる経営システムをはじめ、あっけらかんに展開する凄い現実にとだ然とするばかり。

『東と西 横光利一の旅愁』関川夏央著 講談社刊 2012年9月第1刷

今まで有名な横光利一の「旅愁」を読む機会がなく、いつか機会があれば読まなきゃいかんと思っていた。しかしこの関川夏央の本を読んで、「旅愁」は後半部分がやや惰性に乗って書き継がれたことが分かり、今更読むという気にはならなくなった。この本は横光利一のことだけでなく、彼の生きた昭和初年から敗戦ごろまでの日本の文壇や、欧州(とくにフランス)に来ていた日本人(林芙美子も欧州に行っていたんですね)の生き様を新聞記事風に書いている。

『銀色の月 小川國夫との日々』小川恵著 岩波書店刊 2012年6月第1刷

小川國夫の夫人が彼との出会いから死別までを感性的な鋭い文章で記した手記。作家の妻となるということの辛苦が、繊細な文章で記されている。作家の堀江敏幸推薦で小島信夫文学賞・特別賞を受賞とあるが、これはちょっと仲間内の花束という感じがしないでもない。

『幕末史』半藤一利著 新潮社刊 2009年9月第7刷

今月はあまりにも歴史関連を集め過ぎちょっと持て余しました。感想は来月に。

文庫  こぼればなし

~~アートフェスティバル、5月のころ~~

毎年のことですが、5月には、一か月間の「アートフェスティバル」がありました。この時期伊豆高原に住む幸せを感じます。100軒近くの場合に、さまざま

まなアートが並びます。

沙羅の樹文庫で開かれた「100 かいだてのいえ」の読み聞かせほかのアトラクションも大好評で大賑わい、楽しかったです。子どもより大人の人が多かったのですが、笑えましたね。写真をとりましたが、子どもも大人もいい顔してました。

私は昨年が続いて今年も「さき織り展」に参加しました。2年前のさき織り展をみて、6月すぐに先生の所に行き始め、昨年はじめて作品を並べていただきました。「あなたの作品、欲しいという方がいたわよ」という声に気をよくして、今年はたくさん作ってあったものを並べ、みんな買っていただき、「好きなものって、人それぞれで違う」ということを改めて感じました。私にはちょっと気に入らないものも、人には「これすてきね」となるのだということです。来年はもっともっとがんばっちゃいまーす！

大好きな「スペース沙羅」「ローズテラス」に出かけ、新しい「さき織り」の展示を見て、私も作ってみたいなあと思う作品に出会い、前から行ってみたかった「ジャズの流れるカフェ」にお邪魔し、現役大工さんの版画作品に惚れこみました。どこも、行けばオーナーさんや作家さん、時には会場に来ている方も会話が弾みますし、好きなものに出会えて買える場合もあります。今年私は藍染のショールと山ブドウのつるで編んだブローチ、ジャズマンの版画絵葉書を買いました。行きたい所はもっとあったのですが、私の都合と休館日があわなくて、行けないところが沢山ありました。

5月終わりに横浜に出かけたついでに、「井上ひさし展」を見てきました。好きな人ですが、読んでいる作品は少ないなあと思いました。すごくたくさん作品があるのですよね。会場で「ふかいことをおもしろく一創作の原点」と「ふふふ」の2冊を買ってきて読み

終わりました。どちらもエッセイですが、生き方についていろいろ考えさせられました。前に沙羅の樹会員の若い女性から「吉里吉里人」を勧められて、まだ読んでいないので読みたいなあと思いましたし、沙羅の樹で聞ける予定だった「握手」、本が並んでいるのを見て改めて聞いてみたいなあと思いました。(中西 景子)

本について語りましょう会

❖ 5月にやったイベントのご報告その1 ❖

私たちスタッフの案内や宣伝が悪かったせいでしょか、又いつも来てくださる方々もご都合がつかなかったりで、スタッフ含めほんの数名の会となりました。

その中で、準スタッフのMちゃんは「黒猫亭でお茶を」シリーズがとても好きで、特に、黒猫がいるカフェで、お客さんのモグラやノラネコ、ネズミたちとお茶を飲む楽しいシーンが気に入っているとか。T君は『ハリーポッターと炎のゴブレット上・下』が、ハリーポッターシリーズの中で最高だとか…。普段、この2人がどんな本が面白かったのか、子どもから聞く機会がなかったので、私としてはいい時間になりました。

又、T君は、映画化されたことでその原作を読みたいと思うと言い、そのことから、私たち大人も話しが映画と本の絡みに移っていきました。

本を読んで映画を観たら本のイメージがこわれてしまい、がっかりしたという人が多く、本を読んで、その登場人物が映像とばっちり合致したのは、何と言ってもあの『風と共に去りぬ』よねえー。私なんか、あの映画の撮影場所に行き、スカーレットが2階から1階のロビーに下りてくる真っ赤な絨毯の敷かれている階段を実際下りてみて感激したわあ、と、Oさん。

そんな話がでると、私も『エデンの東』の映画のジェームズ・ディーン演ずるキアルは、本ではどうかと思って原作を読んでみたら、本にはキアルとアロン（双子の兄）の母親の生い立ちから書かれていて、映像になったのは、原作の最後のほんの数ページでしかなく、脚本とはこういうものか、と学生時代に深く感じ入ったことを思い出しました。日本では漱石の『明暗』続編を水村美苗が、海外では『風と共に去りぬ』『嵐が丘』などの続編がありますが、その中では、私が最近読んだもので、『若草物語』の続きを書いた『マーチ家の父』がいいな、と思ったことなど、《本について語りましょう》という本題から、話は広がって、とりとめのない、でも、本好きにはまた一味違った楽しいひとときとなりました。(森川 理恵)

❖ イベントその2・若葉のころのおはなし会 ❖

今年は、東京・立川の幼稚園・保育園・小学校におはなしを届けている立川おはなしボランティアのみなさんに語っていただきました。さすが、子どもに届けることを主眼にしているだけあって、声、ことば、表情がとてもはっきりしていて、しっかり、聴き手に届くおはなしでした。みなさんご存知のこんなおはなしも。——
若返りの水、手なし娘、宝化け物、太郎コオロギ（日本）、まほうのかさ、つくみひげの王さま、黒いブッカと白いブッカ（外国）……。そして、わがおはなし・沙羅のメンバーは、若葉（うた）、姉妹富士、月夜のバス、ボタンインコなどを熟演？しました。♥子どものためのおはなし会は文庫あれこれで。(さ・ら)

立川おはなしボランティアのみなさん

